

〔発言者〕 福田須磨子

〔発言年月日〕 1955 年

〔生年、被爆地、職業など〕 1922 年生まれ。長崎で被爆。詩人、作家。

〔内容〕

何もかも いやになりました
原子野に屹立する巨大な平和像
それはいい それはいいけど
そのお金で 何とかならなかったかしら
“石の像は食べぬし腹の足しにならぬ”
さもしいとって下さいますな
原爆後十年をぎりぎりに生きる
被災者の偽わらぬ心境です

ああ 今年の私には気力がないのです
平和！平和！もうききあきました
いくらどなって叫んだとて
深い空に消えてしまうような頼りなさ
何等の反応すら見出せぬ焦躁に
すっかり疲れてしまいました
ごらん 原子砲がそこに届いている

何もかもいやになりました
皆が騒げば騒ぐほど心は虚しい
今までは 焼け死んだ父さん母さん姉さんが
むごたらしくて可哀想で
泣いてばかりいたけど
今では幸福かも知れないと思う
生きる不安と苦しさ
そんなこと知らないだけでも……

ああ こんなじゃないけないと
自分を鞭打つただけど

〔注〕

極限状況の体験を表現する詩や文学を読むことは、被爆者のおかれた心理の理解を深める。被爆者による被爆遺構めぐりのなかでも引用されることがある、福田須磨子さんの詩である。

(福田須磨子「ひとりごと」『長崎の証言双書『原子野に生きる』、汐文社所収。初出は朝日新聞への投稿)